バルザック全集
10
東京創元社

バルザック全集　第十巻

昭和四十九年三月二十五日　発行

訳者　新庄嘉章
水野亮
伊吹武彦

発行所　(株)東京創元社
代表者　秋山孝男
(振)東京都新宿区新小川町一一一六
電話　東京(〇三)二六八一八二三一
振替　東京一五六五

印刷・相馬印刷株式会社
製本・株式会社鈴木製本所
用紙・北越製紙・富士川洋紙店

万一、落丁乱丁がありましたらお取替えいたします。

Mar. 1974 Printed in Japan. © TOKYO SOGEN-SHA

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

バルザック全集　第十巻

目　次

セザール・ビロトー……五

第一部　黄金時代のセザール……九

第一章　夫婦の口論……一一

第二章　セザール・ビロトーの前歴……二六

第三章　不幸の芽……五三

第四章　過度の出費……六九

第五章　真の哲人と大化学者……八八

第六章　二つの星……一〇六

第七章　舞踏会……一三一

第二部　非運と闘うセザール……一五一

第八章　数条の稲妻……一五三

第九章　雷の一撃・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一六〇
第十章　大銀行業者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一七一
第十一章　友　人・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一八九
第十二章　破産者の最後の日・・・・・・・・・・・・・・・二一〇
第十三章　支払停止・・・・・・・・・・・・・・・・・・・二三二
第三部　セザールの凱歌・・・・・・・・・・・・・・・・・二四五
第十四章　破産者の通る道・・・・・・・・・・・・・・・・二四七
第十五章　もっとも美しい光景・・・・・・・・・・・・・二六一
第十六章　昇　天・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・二七六
赤い宿屋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・二八五

ゴーディイサール・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・三一九

解　説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・三五三

装幀　松田正久

セザール・ビロトー

新庄嘉章 訳

香料商・パリ第二区助役・シュヴァリエ・ド・
ラ・レジョン・ドヌール五等名誉勲章帯勲者

セザール・ビロトーの栄枯物語

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

アルフォンス・ド・ラマルチーヌ氏へ

氏を敬愛する

ド・バルザック

第一部　黄金時代のセザール

第一章　夫婦の口論

冬の夜の間、サン・トノレ街では、物音はただ一瞬しかやまない。芝居見物や舞踏会からの帰りの馬車がたてていたざわめきを、今度は中央市場へと急ぐ青物屋の荷車が続けるのである。パリの騒音がかなでだす大交響楽の、朝の一時頃にきまってやってくるその停音符のところで、ヴァンドーム広場近くに居をかまえた香料商人セザール・ビロトー氏の夫人は、おそろしい夢にびくりと目をさました。夫人は二重になったおのれの姿を見たのだった。自分が襤褸をまとって、ひからびた皺のよった手で自分の店のドアの取手を回しながら姿を現わしたのだった。その店のなかには、自分が、同時に、入口の閾の上と、売台のなかの腰掛の上にいた。自分が自分に施物を乞うた。夫人は、ドアのところで話す自分の声と、売台のなかで話す自分の声とを耳にした。夫人は、夫をつかまえようと思って手をのばした。が、そこの場所はつめたかった。そこで夫人の恐怖は極度に達して、首を動かすことも出来なくなった。首筋が硬直してしまったのだった。咽喉の内壁がくっついて、声も出なかった。夫人は坐ったままそこに釘づけにされてしまい、目は大きく見開かれたまま動かず、髪はぞっと逆立ち、耳は異様な物音にみたされ、心臓はしめつけられながらも、はげしく波うち、ついには、この、二枚扉が開かれたままになっている寝室の真ん中で、汗はびっしょりかきながらもからだは氷のように冷たくなっていた。

恐怖は、なかば病気の根源となるような感情であって、それは人体の機械をあまりにも狂暴にしめつけるので、機械の諸機能はいきなりその全能力を発揮させられるか、あるいは崩壊の最後の段階にまで押しすすめられるかするのである。生理学はこれまで長い間こうした現象をもてあましてきた。こうした現象も結局は単なる心の内部の雷撃にすぎないのだけれども、すべての電気的偶発事とおなじく、またこれはこれなりに奇妙な気まぐれなところがあって、生理学の既成の体系を混乱させたり、その臆測の諸説をくつがえしたりするのである。もっともそのような説明も、電気が人間の思考のなかにおいて演ずる広大かぎりなき役割を学者たちが認知するような時代になれば、平々凡凡なものとなるであろう。

ビロトー夫人は、この時、意志が未知のメカニズムによって放散せられるか集中させられるかしておそろしく迸出

する際に生ずる、なにかしらこう光に似た苦痛を感じたのだった。かくしてわれわれの時計ではかれば非常に短いが、しかし夫人の急速な印象から言えばはかるべからざるほど長い時間の間に、この気の毒な婦人は、異常な力の働きによって、日中機能が正常な状態にある場合にはとても思いもおよばぬような、多くの観念を思い浮かべ、多くの思い出をよび起したのだった。次のいたいたしい独白にしても、実際は、実に馬鹿々々しい矛盾だらけな、意味のない数語に要約することが出来るのである。

《ビロトーが私のベッドから出て行く理由なんてなにもないはずだけど！　犢(こうし)の肉をあんなにあがったから、ひょっとして、具合が悪くなったのかしら？　でも、もし具合が悪いのなら私を起したはずだ。十九年このかた、この同じ家の中で、この寝台にいっしょにやすんでいるけれど、ただの一度だって、あのやさしいひとは、私にいわずに床を出たためしはない！　あのひとは、国民軍詰所で夜をすごした時以外は外泊したこともないのだ。そもそも今晩は私といっしょにやすんだのだったかしら？　もちろんだわ、まあ私なんてとんまなんだろう！》

夫人は寝台を見やった。すると、ほとんど円錐形の、人間の頭のかっこうをしたままそこに放りだされた夫の寝室用の頭布が眼に映った。

《では死んだんだ！　自殺したのだろうか？　でもなぜ？》と夫人はふたたび考えはじめた。《区役所の助役に任命されてからのこの二年間というもの、あのひとはまったく変な具合に変ってしまった。あのひとを公職につけるなんてことは、実際そう思うけれど、気の毒なことじゃないだろうか？　あのひとの商売はうまくいっているのだ。私に肩掛けを買ってくれたくらいだもの。だがひょっとすると、その商売がうまくいってないのかしら？　馬鹿！　そんなことがあれば私にわかるはずだ。だが男が心の奥底にどんな秘密を持っているか、どうして知り得よう？　女の場合にだってそうだけど。知り得なくたって悪いことでもなし。それにしてもきょうは、五千フランもの品を売ったじゃないか！　それに助役ともあろうものが、おめおめ自殺することなどあろうはずがない。法律を知りすぎるほど知ってるんだもの。じゃいったいどこにいるんだろう！》

夫人は首を回すことも、また手をのばして呼鈴の紐をひっぱることも出来なかった。それをひっぱりさえすれば、料理女と三人の店員と一人の小僧が起きたであろうに。目が覚めてもまだ続いている悪夢にとらわれている夫人は、すぐ隣りの部屋で、その扉が夫人の寝台の足許に開くようになっている部屋で、娘が安らかにまどろんでいることもすっかり忘れていたのだった。ついに夫人は叫んだ。《ビロトー！》だがなんの答もなかった。夫の名前を大声に呼んだように思ったのだが、実は心のなかで叫んだにすぎないのだった。

《情婦(おんな)でも持っているのかしら？　そんなことするには、あのひとは人がよすぎる》と夫人はふたたび考えはじめた。《それに第一、そんなこと出来ないほど私を愛してい

る。あのひと、ロガン夫人にいわなかっただろうか、たとい心の中でだって私に不義をしたことはないってね。まったくあのひとは、正直がこの世に生まれ出たようなひとだ。もしも誰かが天国に行くのだったら、それはあのひとじゃなかろうか？　あのひと聴聞僧にだってなにを告白することなどあるかしら？　告白といったってたわいのないことばかりだわ。あのひとは王党派だけど、どうしてだか、決して自分の宗教をふりまわすようなこともしない。かわいそうに、八時になると、淫売屋にでも行くようにこそこそミサに出かける。あのひとは神をおそれている。神そのものをおそれている。地獄なんてあのひとには関係ないものだ。そうしたあのひとにどうして情婦などあり得よう？　あのひとはなかなか私の腰のまわりを離れようとはしない。うるさくなるほどだ。あのひとは私を自分の目以上に愛している。私のためには盲になってもいいというだろう。十九年間というもの、あのひとは、私にむかって一度だって声を荒らげたことがない。娘も私のつぎなのだ。そうだ、セザリーヌがあそこにいたんだ……セザリーヌや！　セザリーヌや！　ピロトーは頭の中に考えたことはなんでも私に包みかくさず話してくれた。あのひとが『プチ・マトロ』（アンジュー河岸の小間物化粧品店で、夫人はこの店の女店員をしていたとき、ピロトーに見そめられたのである）にやって来た時に、自分はながくつきあってみないとわからない人間だといったが、まったくその通りだ！　それなのにいなくなってしまった！……まったくただごとではない》

夫人はようやくのことで頭をまわして、部屋のなかをこっそり見まわした。部屋のなかは、とても言葉ではいえないような、風俗画家の筆によってのみ描けるような、あの夜の絵画的な効果にみたされていた。投影がつくり出しているおそろしいジグザグ、風をはらんだ窓掛けの幻想的なかたち、豆ランプが紅いサラサの襞にうつし出しているおぼつかなげな光のたわむれ、まんなかの緋色のところが泥棒の目のように光っている擬宝珠が反射する焔、幽霊がひざまずいているように無気味な着物の影、結局、想像力が苦痛を感知し、その苦痛を大ならしめる力しかない時にこの想像力をおそれさせるこうしたすべての奇妙なものは、どうした言葉によっていい表わすことが出来るであろう？　ピロトー夫人は、自分の部室の先にある部屋に強い光を見たように思った。で、いきなり火事だと思った。しかし、紅い薄絹を見ると、それが流血の溜りのように見えて、これはてっきり泥棒だという考えが夫人の頭をみたした。とりわけ家具の置かれ具合を、格闘の跡のように思いこんだ時には、この考えは動かぬものとなった。と、金匣の中の金高が思い出されて、夫の身を案じるけなげな気持が、熱を冷却させてくれた。夫人はびっくりして、寝間着のまま夫を助けようと、部屋のまんなかに飛び出した。夫人は、夫が犯人たちと闘っているように思いこんだのだった。「ピロトー！　ピロトー！」と、ついに夫人は恐怖にみたされた声で叫んだ。

夫人は、隣りの部屋で、物差し片手にしきりに部屋の中を計っている夫の姿を見つけた。彼は、チョコレート色の

斑点がある緑色のインドさらさの部屋着をいいかげんにひっかけているだけなので、自分ではいっこうに感じないのだけれど、脚は寒さのために赤くなっていた。それほど彼は夢中になっていたのだった。セザールがうしろを向いて、妻に「ええ、なんだって、コンスタンス？」といった時には、彼のようすは、計算に夢中になっている誰ものようすがそうであるように、実に愚かしく滑稽に見えたので、ビロトー夫人は思わずふき出した。

「まあ、セザール、あんたってほんとに変な方ね」と夫人はいった。「なぜ私に一言もいわないで、私をひとりぼっちにしたの？　私こわくて、もう少しで死ぬところだったわ。なにごとが起ったのかと思って、それは心配だったわ。いったいそんなところで風に吹きさらされて、なにをしてらっしゃるの？　風邪を召すわよ。わかって、ビロトー？」

「あいよ、もうやめたよ」香料商は部屋に戻って来ながら答えた。

「さあ、あたりにいらっしゃいな。なんでまたこんな物好きなまねをなさるの？」ビロトー夫人は、灰を掻きわけて、火を一生懸命おこしながらいった。「ごごえちまうわ。まあこんな肌着ひとつで起き上って来るなんて、私もどうかしてるわね！　でも私、ほんとにあなたが殺されたのかと思ったのよ」

香料商は、燭台を暖炉棚の上に置き、部屋着をきちんとまとって、機械的に、妻のフランネルのペチコートをさがしに行った。

「さあさ、これをお着」と彼はいった。「二十二に、十八」と相変らず独言（ひとりごと）をつづけながら、「すばらしい客間（サロン）が出来るぞ！」といった。

「まあ！　ビロトー、あなた気違いになるんじゃないの？夢でも見ているの？」

「いいや、わしは勘定してるんだよ」

「そんな馬鹿なまねなさりたいんだったら、せめて、朝までお待ちになったらいかが」夫人は、ペチコートを寝間着の下につけながら叫んだ。そして娘の寝ている部屋の扉を開けてみた。

「セザリーヌは眠ってますわ」と夫人はいった。「私たちの話も大丈夫聞えないわ。さあ、ビロトー、話してちょうだい、いったい、どうしたというの？」

「舞踏会を催すんだよ」

「舞踏会ですって！　私たちが？　あなたほんとに夢をみているのね」

「夢なんかみてやしないよ。いいかね、ひとは、いつも、自分の置かれている地位に相応したことをしなくてはならないのだ。政府はわしを有名にしてくれた。わしは政府に属してる人間なんだ。わしたちは、政府の精神をば発展せしめつつ援助しなくてはならないのだ。リシュリュー公爵はフランスの土地を連合軍の羈絆（きはん）から脱せしめられたところだ。（一八一五年フランス軍はワーテルローに惨敗し、国土の一部分の五カ年間占領が決定されたが、外務大臣リシュリュー公の手腕により一八一八年に連合軍は撤兵した）ラ・ビヤルディエール氏の言うところに従えば、パリ市を代表するところの役人たちは、おのおのそ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com